漢方薬を用いた
外科的領域へのアプローチ

日本薬科大学薬学部漢方薬学分野講師
糸数七重

自己紹介

1997年　東京大学薬学部卒（薬品作用学教室）
1999年　東京大学大学院薬学系研究科修士課程修了（薬品作用学教室）
2004年　東京大学大学院医学系研究科博士後期課程修了（生体防御機能学教室）
（2001年　ミネソタ大学医学部留学（米国））

2003年～2006年　国立医薬品食品衛生研究所生薬部研究員
2006年～2009年　武蔵野大学薬学部一般用医薬品学教室助手/助教
2009年～　日本薬科大学薬学部薬学科漢方薬学分野講師
2014年～　同・漢方資料館学芸員補
2017年～　中国医薬大学都築伝統薬物研究中心交換研究員（台湾）

漢方とは何か

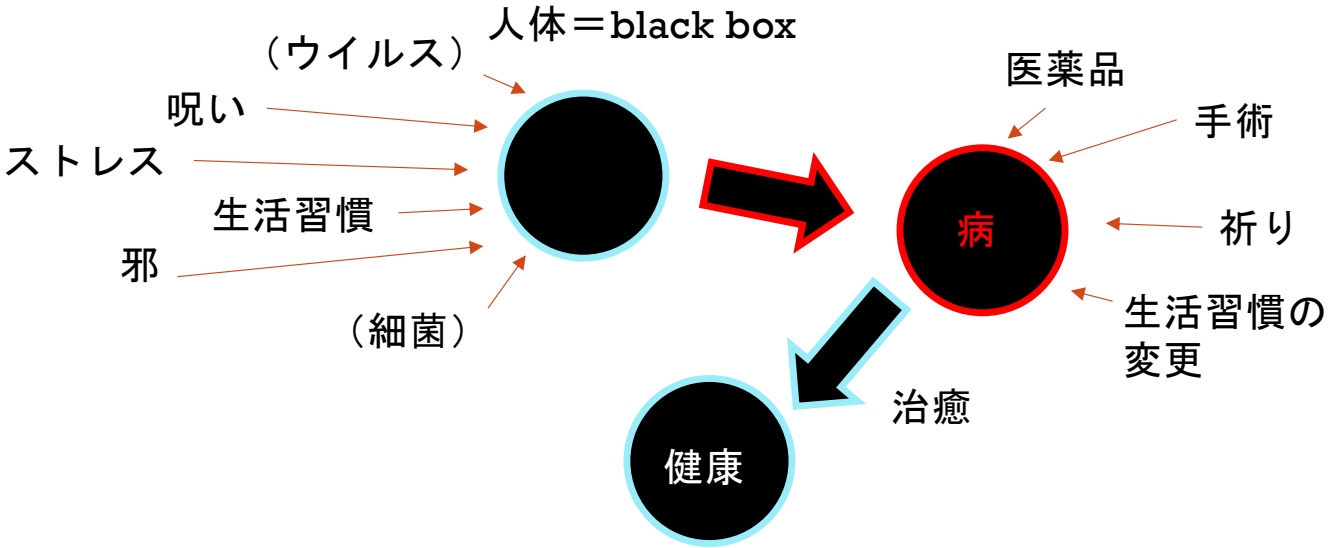
- 伝統医学/医療（Traditional Medicine）のひとつ
- 補完（Complementary)医療のひとつ
- 統合（Integrated ）医療のひとつ

Traditional, Complementary and Integrated Medicine

※　代替（Alternative）医療やCAM（Complementary and Alternative Medicine)という呼び方は現在はあまり使われない

※　他にも全人的ケア（Holistic Care）のひとつという捉え方もある

TCIMにおける
人体と病/治癒のイメージ

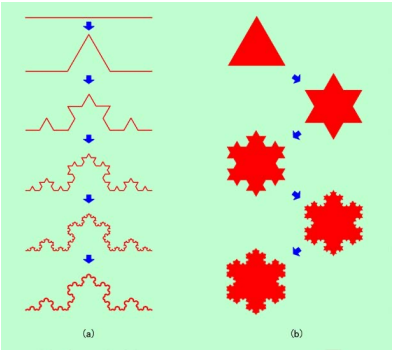


Black boxを分解して仕組みを解析する＝近現代医学
Black boxを観察して仕組みを解釈する＝伝統医学

伝統的な考え方に基づく
漢方処方の解釈
-生薬の組み合わせと証について-

(漢方を含む)
伝統医学的な身体のイメージ

フラクタル



- 図形の部分と全体が同様な形をとる自己相似（再帰）になっているもの
- 海岸線などの、どこまで拡大してもその複雑さが失われないもの
- 直感的にはイメージしやすいが、数学的には非常に記述しづらい

らせん

- 三次元曲線の一種
- 回転しながら垂直方向に移動する
- 「繰り返す」が「重ならない」

具体的には…

身体に影響を及ぼし得るもの

- 外部環境の変化
- 心理的な変化
- 何らかのストレス（邪）

これらを含む様々なものがimaginary な経路を介して身体に影響を及ぼす

これらのimaginaryなものを「気・血・水」や「経絡」の語で表す

身体の変化に「規則的な物語」としての意味が与えられる

- 黄帝内経（素問）

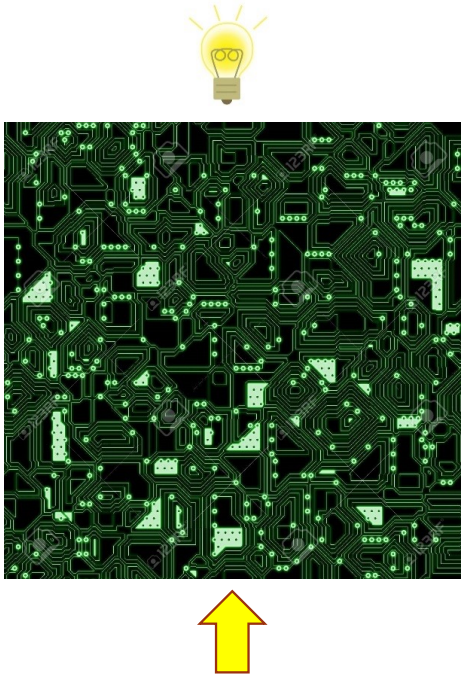
「女性は7の倍数、男性は8の倍数で身体の節目を迎える」

- 金匱要略「果実菜穀禁忌」「禽獣魚蟲禁忌」

特定の食物については「食べてはいけない期間や日付」が存在する。年齢や性別によって禁忌の指定が異なる場合もある（養生や“未病を治す”一環）

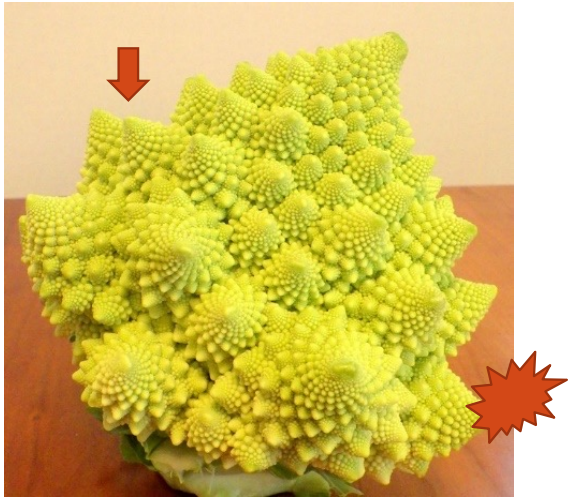
西洋医学的な身体のイメージ

- **非常に精巧な機械**
- トラブルが起きた箇所を狙い撃ちで修理あるいは除去できる
- わかっていない仕組みがある
- わかっていない部分はひとまず置いておいて、わかっている部分だけでトラブルに対処する
- でも、わかっていないので見込みで何かすると大惨事になる可能性もある
- 仕組みがわからないと身動きが取れない
- **ただし、仕組みがわかる部分については、すべてphysicalな証拠がある**

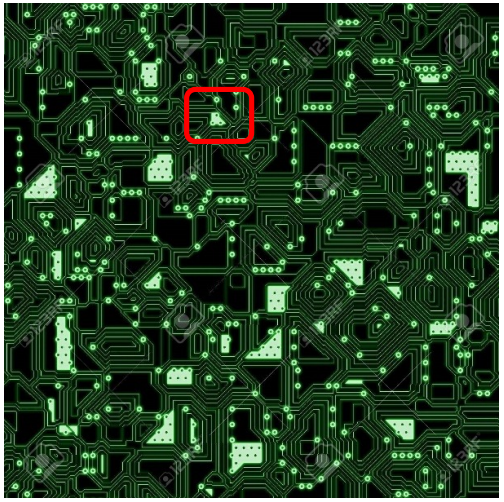


身体のトラブルイメージ

東洋的



西洋的



漢方では「内外からの刺激や失調」と「不調の現れ方」の関連が
複雑であり、治癒には全人的なバランスの回復が必要であるとする

伝統的な考え方-漢方理論-

- **病態に関する解釈**
- 八綱（陰陽・虚実・表裏・寒熱）
- 六病位
- 気・血・水理論
- 臓腑

- **処方に関する解釈**
- 生薬の四気五味
- 帰経（身体のどこに作用するか）

漢方薬を使うためには

診断方法、漢方理論、生薬と方剤を習得する

診断方法とは

　　四診（望診、聞診、問診、切診）

漢方理論とは

　①八綱（陰陽・虚実・表裏・寒熱）

　②六病位

　③気血水

　④臓腑

方剤とは

　　一般処方：「２１０」処方（医療用製剤１４８処方）

八綱弁証

八綱：陰陽・虚実・表裏・寒熱

八綱の視点

　総合的視点：陰陽

　病位：表裏

　病状：寒熱

　病勢：虚実

治療法

　表⇒発散

　裏⇒攻下

　実⇒瀉

　虚⇒補

　熱⇒清涼（実：瀉火、虚：滋陰）

　寒⇒温補散寒

現象の偏りを表現する理論

バランスをとることで治療に導く理論

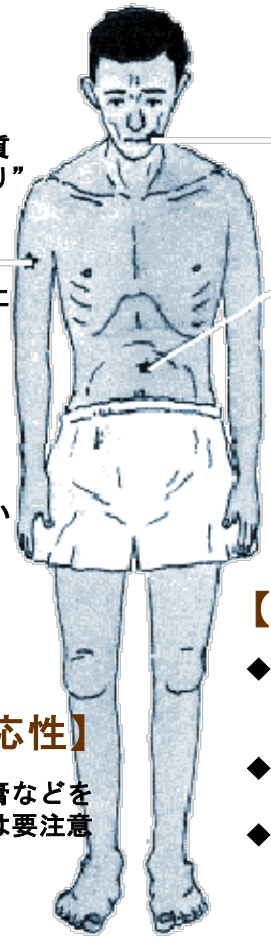
＊局所的視点と全体的視点との統合の上に現象を捉えることが大事

陰陽

	陽　証（陰虚証を含む）	陰　証（陽虚証を含む）
1	熱産生、発汗、循環器、消化管、内分泌などの代謝･生理的機能の冗進傾向（陰虚による仮亢進）	熱産生、発汗、消化管、内分泌などの代謝･生理機能の低下傾向
2	基礎代謝がやや高い（普通･低下）	基礎代謝が低い
3	体温高い傾向	体温低い傾向
4	発汗高い（普通･低下）	発汗少ない
5	収縮期血圧が高い傾向	収縮期血圧が低い傾向
6	拡長期血圧が高い傾向	拡張期血圧が低い傾向
7	胃の蠕動が活発である（普通･低下）	胃の蠕動不活発、ｱﾄﾆｰ傾向
8	交感神経緊張型	迷走神経緊張型
9	あつがりである	冷えやすい
10	顔面は赤味が多い	顔面は蒼白い
11	冷たい水や冷たい食事を好む	白湯やあたたかい食事を好む
12	舌は乾燥して、口渇がある	舌は湿潤して、口渇がない
13	小便は黄色	小便は清澄である
14	唾は普通量である	唾は多い
15	便秘傾向である	下痢しやすい

虚証と実証（日本漢方）

虚証



【体型】
◆やせ型の下垂体質
◆いわゆる“水太り”

【筋肉】
◆弾力・緊張ともに不良で発達悪い

【体温調節】
◆夏の暑さに弱い
◆冬の寒さに弱い
◆寝汗をかきやすい

【皮膚】
◆栄養状態不良
◆光沢・艶なし

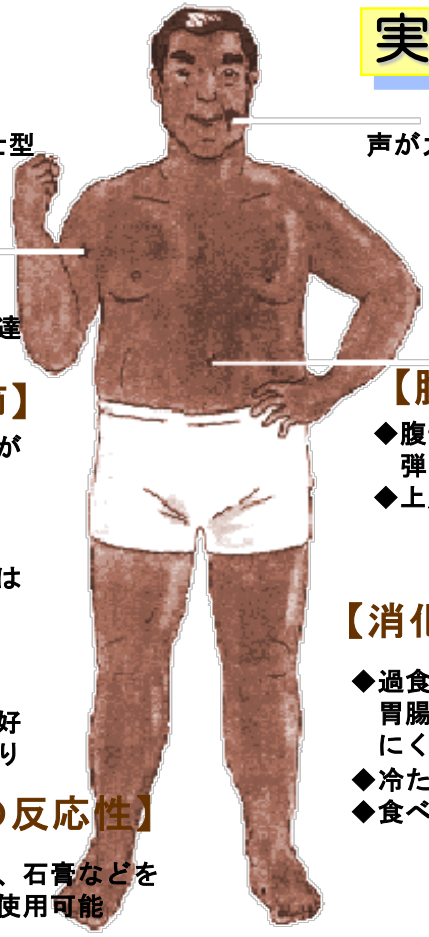
【薬剤への反応性】
◆大黄、麻黄、石膏などを含む処方の使用は要注意

声が弱々しい

【腹部】
◆腹筋は薄く、全体に軟らかく緊張に欠ける
◆上腹角が鋭角的
◆心窩部拍水音を聴いたりする

【消化器症状】
◆過食すると不快嘔吐、下痢しやすい
◆冷たい物で腹痛下痢しやすい
◆食べるのが遅い

実証



【体型】
◆筋肉質の闘士型
◆固太り

【筋肉】
◆弾力的で緊張よく発達

【体温調節】
◆夏は暑がるが活動的
◆冬は比較的寒がらない
◆通常、寝汗はかかない

【皮膚】
◆栄養状態良好
◆光沢・艶あり

【薬剤への反応性】
◆大黄、麻黄、石膏などを含む処方は使用可能

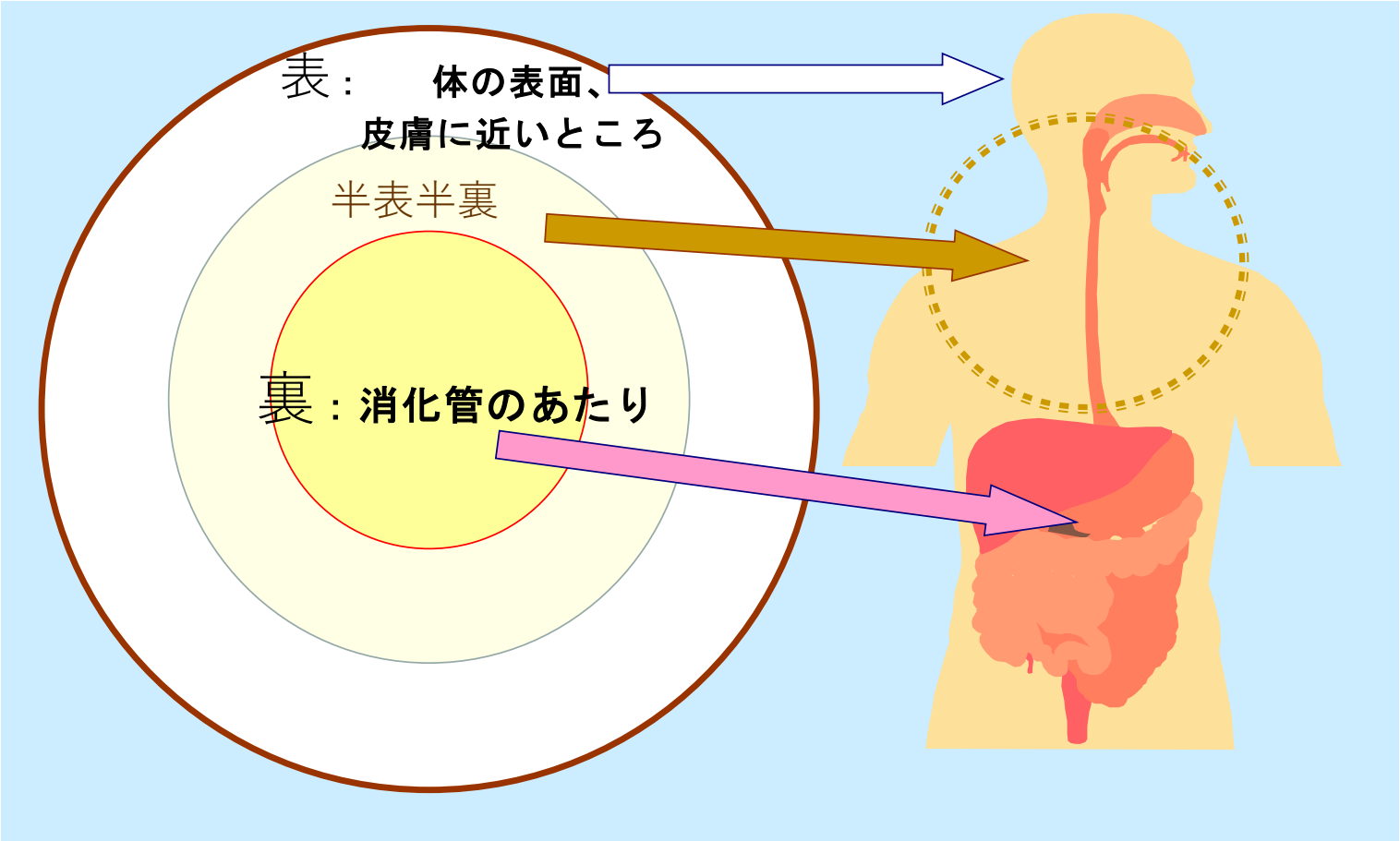
声が力強い

【腹部】
◆腹部は厚く弾力的
◆上腹角が鈍角的

【消化器症状】
◆過食しても胃腸障害起こりにくい
◆冷たい物も平気
◆食べるのが早い

日本医師会編　『漢方治療のＡＢＣ』より

表　裏　ー病邪はどこにいるかー



寒熱

熱：冷やすことにより改善

寒：温めることにより改善

表裏の概念と融合 ⇒ 表熱、裏熱、裏寒 ⇒ 慢性疾患に応用

陰陽の概念と融合 ⇒ 陰証は寒が主、陽証は熱が主

	自覚症状*	顔色	舌苔	口渇	尿の色	便臭
寒	寒気、冷える	蒼白	湿潤	少ない	透明	乏しい
熱	熱感、ほてる	赤色	乾燥	強い	濃黄色	強い

＊：急性期（太陽病期）の判定には注意が必要

生薬の五性

寒	石膏、知母、黄連、黄柏、黄芩、山梔子、大黄、地黄
微寒	柴胡、連翹、牡丹皮
熱	附子、乾姜、細辛
温	桂枝、麻黄、当帰、呉茱萸、膠飴、蜀椒
平	葛根、甘草、茯苓

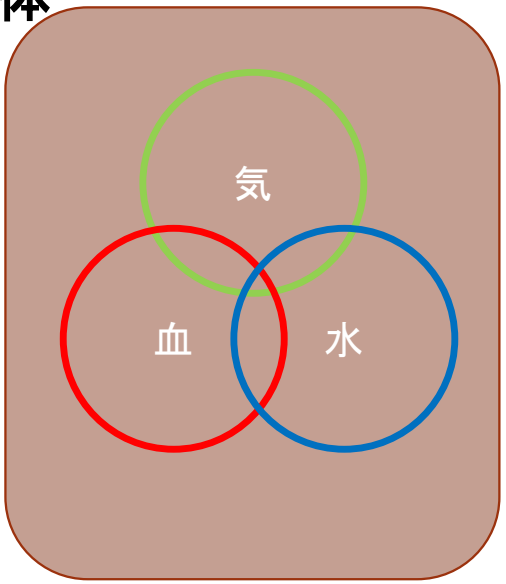
八綱弁証（まとめ）

陽証：表証、熱証、実証

陰証：裏証、寒証、虚証

生命とは何か→動くものである

人体

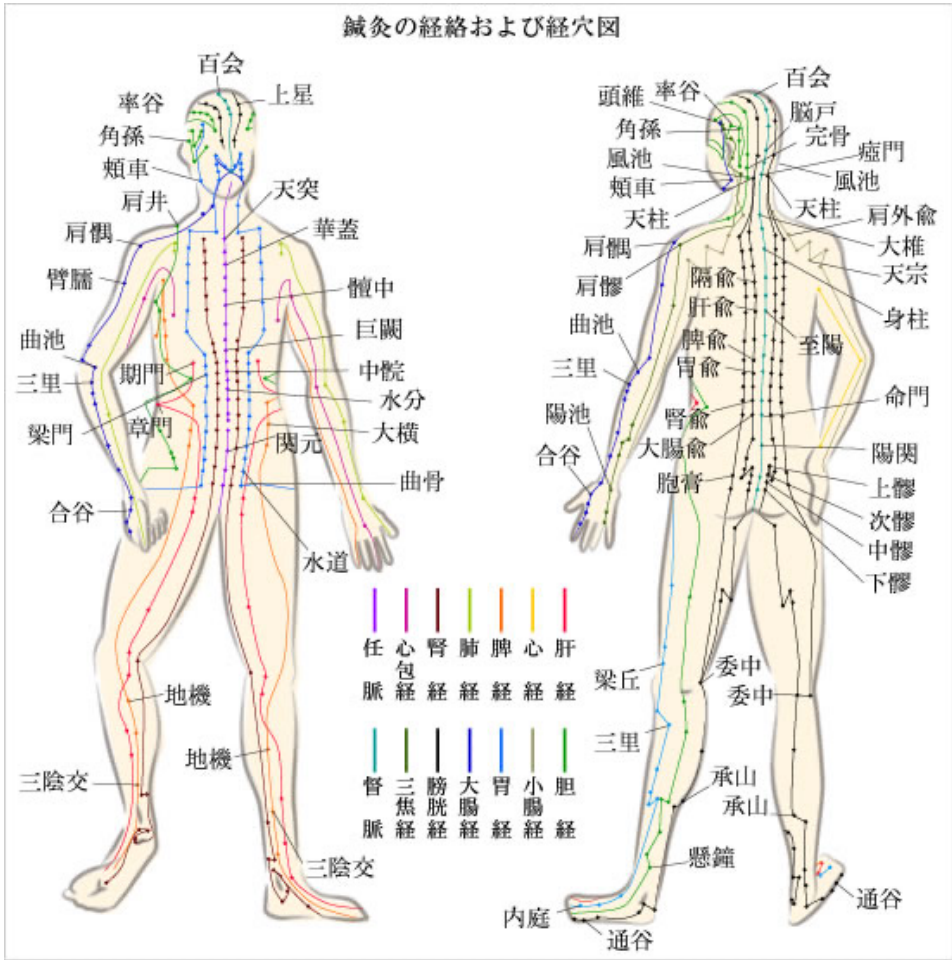


生命活動がある→（人）体の中を、気・血・水が巡っている

気・血・水の量や機能にトラブルが生じると病気になる

- 気…生命の根源、生命活動に関係するもので、形のないもの、呼気や吸気、エネルギーのようなもの
- 血…血液、生殖（特に女性において）に関わるもの、体液のなかで色がついているもの、身体を栄養する液体成分
- 水…体液の中で血液以外のもの、身体を潤すもの、場合によっては浮腫ませるもの、何か「水っぽく」感じるもの

「動くもの」の通り道…経絡



- 気・血・水の通り道
- 経は「縦糸」絡は「横糸」の意
- その中の重要なポイントが経穴（いわゆるツボ）
- 左図には十二の正経と任脈・督脈が記載されているが、他に八の奇経、十五の絡脈（もっと細かいものも）があり、五臓六腑を取り巻き繋いでいる
- (他にもまだある）

五臓について

- 臓腑：身体の恒常性を維持するための様々な**機能を概念化し、それに名前をつけた**もの
- 主要なものを「臓」とし、補助的なものを「腑」とした

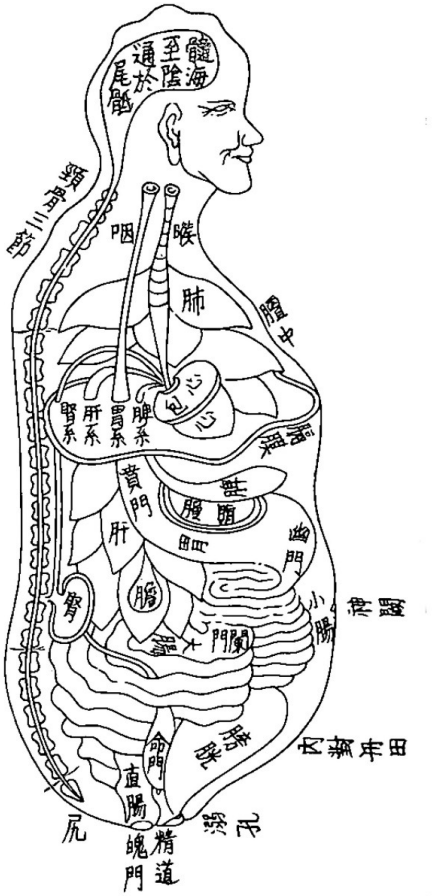
  ……**漢方の五臓**
- 西洋医学の導入に伴い、精緻な解剖が可能に

  ——身体の機能を分担する**具体的な器官**が判明する
- 個々の器官について、それまでの五臓六腑の機能が一番近いものの名称を与えた

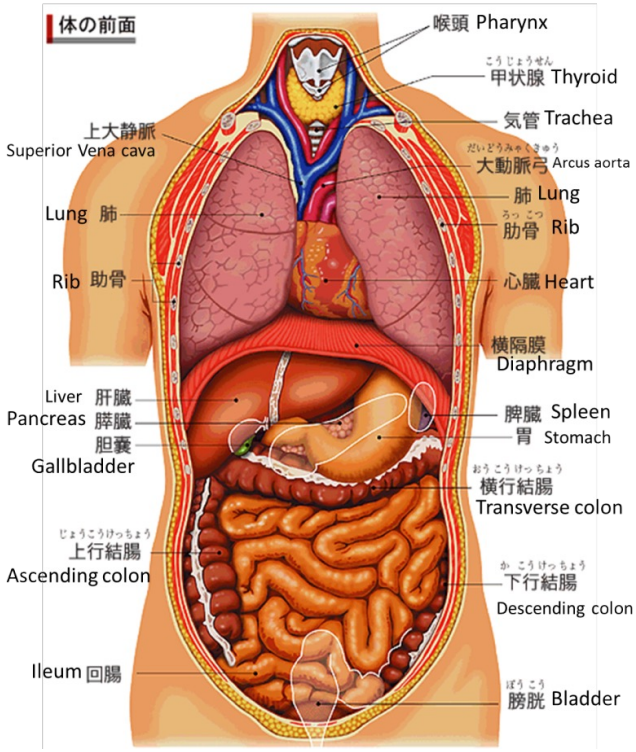
  ……**西洋医学の臓器の名称**

臓腑と臓器

臓腑


髓海
至陰
通於尾骶
咽
喉
肺
心包
心
腎系
肝系
胃系
脾系
肝
膽
胃
脾
小腸
大腸
膀胱
直腸
命門
精道
魄門
尻

臓器


体の前面
喉頭 Pharynx
甲状腺 Thyroid
気管 Trachea
上大静脈
Superior Vena cava
大動脈弓 Arcus aorta
肺 Lung
Lung 肺
肋骨 Rib
Rib 助骨
心臓 Heart
横隔膜
Diaphragm
Liver 肝臓
Pancreas 膵臓
胆嚢
Gallbladder
脾臓 Spleen
胃 Stomach
横行結腸
Transverse colon
上行結腸
Ascending colon
下行結腸
Descending colon
Ileum 回腸
膀胱 Bladder

臓腑（五臓による病態の把握）

「臓」とは身体の奥に隠れている（蔵）という意味であり、身体の奥にある内臓及びその生理機能や病理変化などによって体表に症状が現れる。すなわち、臓腑弁証とは臓腑の生理機能や病理変化及びそれらの相互変化を理論立てて説明することである。

五臓	心	肺	脾	肝	腎	心包
六腑	小腸	大腸	胃	胆	膀胱	三焦

三焦 ： 臓器、脂肪組織、骨を支えるもの

心包 ： 心臓の外膜（気の貯蔵）

臓が主であり、五臓は気・血・津液を貯蔵する

六腑は飲食物の受納・消化、吸収、伝導、排泄を主る

生薬について（処方内容の解釈）

君薬（治療の主薬をなす必須の生薬）

臣薬（君薬の作用を補助し強める生薬）

佐薬（君・臣の作用を調節あるいは副作用を防ぐ生薬）

使薬（処方中の生薬の調和や服用しやすくする生薬）

	桂枝湯	麻黄湯	小柴胡湯	四物湯
君薬	桂枝	麻黄	柴胡	当帰
臣薬	芍薬	桂枝	黄芩	地黄
佐使薬	甘草 生姜　大棗	杏仁 甘草	半夏　人参　甘草 生姜　大棗	芍薬 川芎

漢方処方
―観察と経験則に基づいた医薬品

- 気・血・水とは何か？
- 陰陽とは何か？
- 虚実＝体力の有無？
- 臓腑≠臓器

取り出して根拠を見せることができない

……が、効く／疾患を治療できる

→なぜ効くのか・どのように効くのかを

観察と経験則を根拠として概念的に説明したのが

漢方理論

漢方薬を選択するには……

- 漢方理論に基づいて使用されてきた医薬品である
- いわゆるサイエンスの手法による作用機序の解明はすべてが為されたわけではない
- 漢方理論を知っていれば（西洋医学的な説明ができなくても）“証”の解釈によって処方を選択できる

↓

実用本位の視点から
漢方理論の習得は有用である

実用としての漢方処方学

- なぜこの漢方薬を使用するのか理解できる
- 漢方理論を理解したうえで、納得して漢方処方を使用できる
- 病態について、漢方理論ではどのように解釈するのか理解できる
- その病態に対して、なぜこの処方を使用するのか

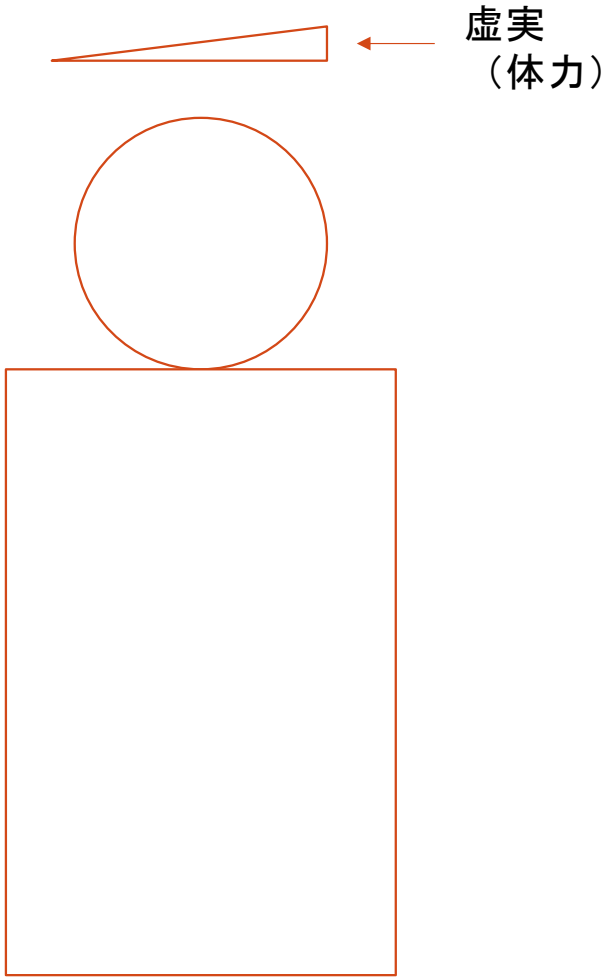
…外科的領域に使われる漢方処方について
・漢方的な身体の状態
・そこにどのように漢方処方が影響しているか

……説明いたします。

外科的領域に用いる漢方処方

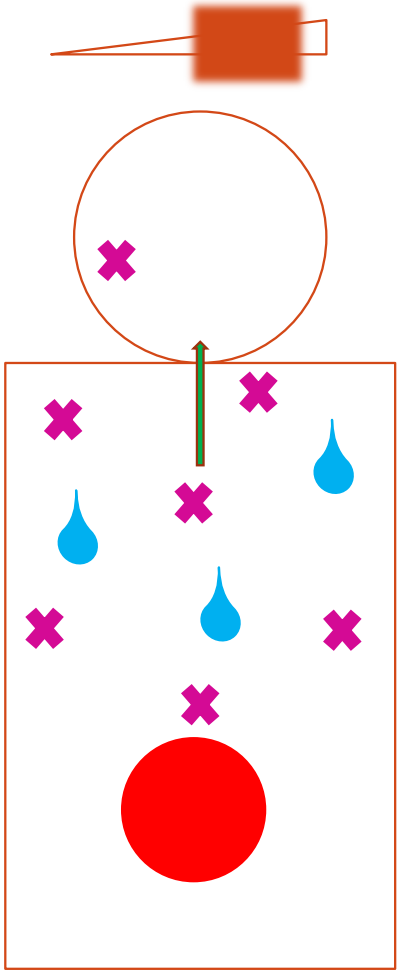
ヒトガタの見方

- 身体の状態
- どこに病邪があるか
- 生薬の影響
- 日本漢方は「方証相対」
- ○○の症状は身体のバランスが
  ××になっているために起こるので
  この方剤中の△△がそれに対応する



桂枝茯苓丸

（桂皮、芍薬、茯苓、桃仁、牡丹皮）



陽／実／裏／熱

比較的体力がある人の「血の滞り」を目標に使用する薬

・火照りやすい
・生理が重い（痛みが強い）
・吹き出物など、肌荒れがある
・赤ら顔になりやすい
・浮腫む場合もある

下腹部に熱が溜まり、身体のあちこちに血が滞ってうまく巡らず、気の逆上が起きがち（ただし精神神経症状はそれほど強くない）な人に用いる

桂枝茯苓丸はどんな処方？

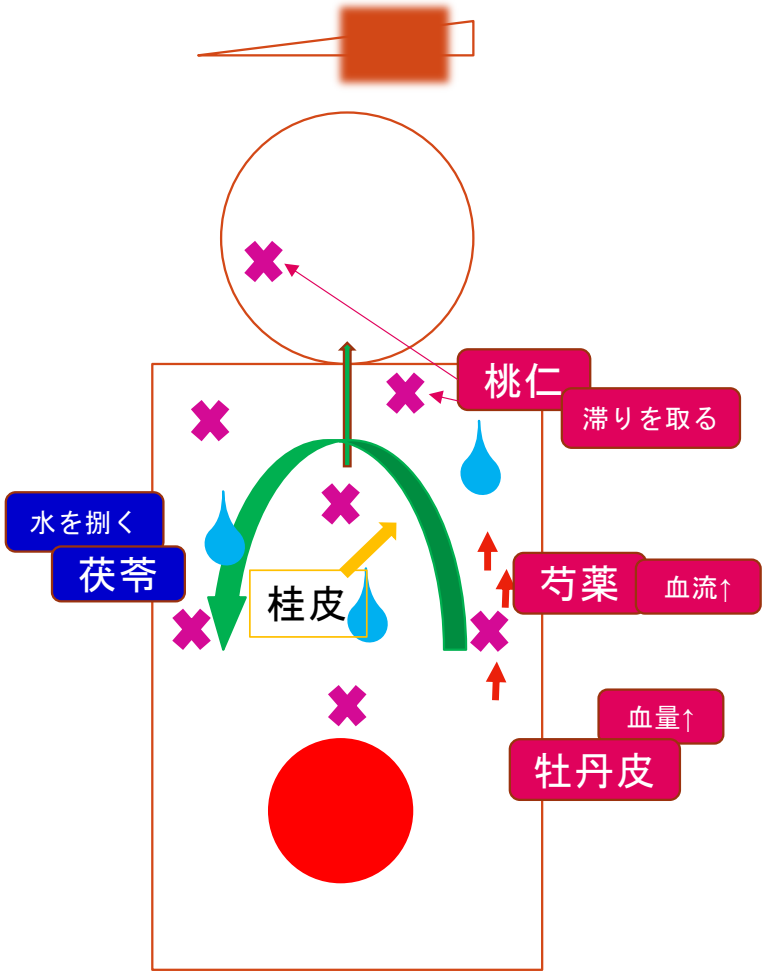
- 体内に熱がある人の、血の滞りによって起きる諸症状に使用する代表的な処方です。婦人科系疾患に使用することが多いですが、血の滞りを目標に打撲傷等の炎症にも応用します。
- ***伝統的な考え方***：血の滞りを取り除き、それに付随して起きる浮腫などの水の滞りを処理し、体内にこもった熱を冷ますと同時に熱症状として生じていた赤ら顔やのぼせを取る生薬が配合されています。基本的には血の滞りを取り除く処方と言えます。この処方を使用する人の症状の中心は血の滞りであり、そのために月経関連の症状や肩こりが生じています。打撲傷や痣等も血がそこで滞っていると考えるため、この処方の適応となります。
- ***効能・効果***：体格はしっかりしていて赤ら顔が多く、腹部は大体充実、下腹部に抵抗のあるものの次の諸症：子宮ならびにその付属器の炎症、子宮内膜症、月経不順、月経困難、帯下、更年期障害（頭痛、めまい、のぼせ、肩こりなど）、冷え性、腹膜炎、打撲傷、痔疾患、睾丸炎

「血」の滞り

あざ

瘀血

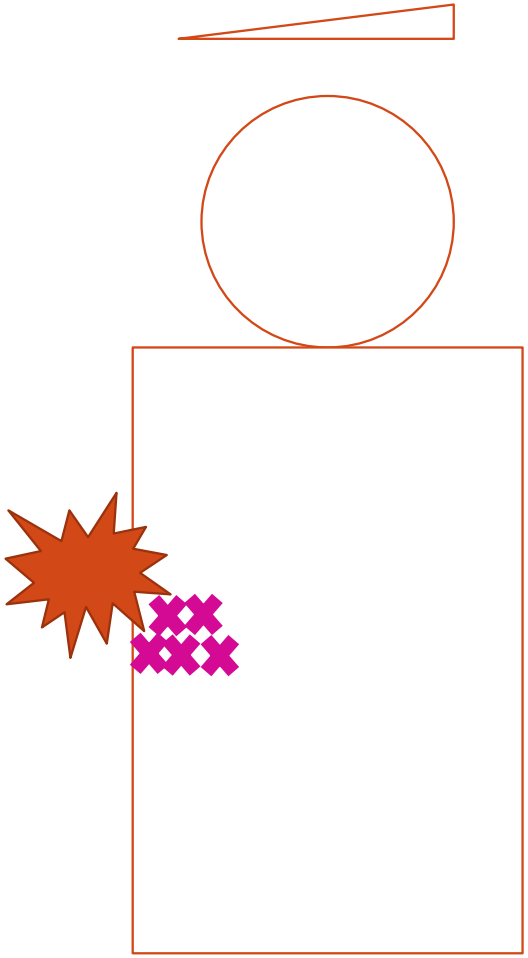
桂枝茯苓丸
桂皮、芍薬、茯苓、桃仁、牡丹皮



- 桂皮…気を巡らせることに寄り逆上を抑え、また滞った血を動かす原動力となる
- 芍薬…筋肉を緩め、緊張を解くことで血流を増やす
- 茯苓…水を捌く
- 桃仁…血の滞りを押し流す
- 牡丹皮…血の流量を増やすことで血の滞りを押し流す

治打撲一方

（川芎、樸樕、川骨、桂皮、丁子、大黄、甘草）



証に関係なく使用できる

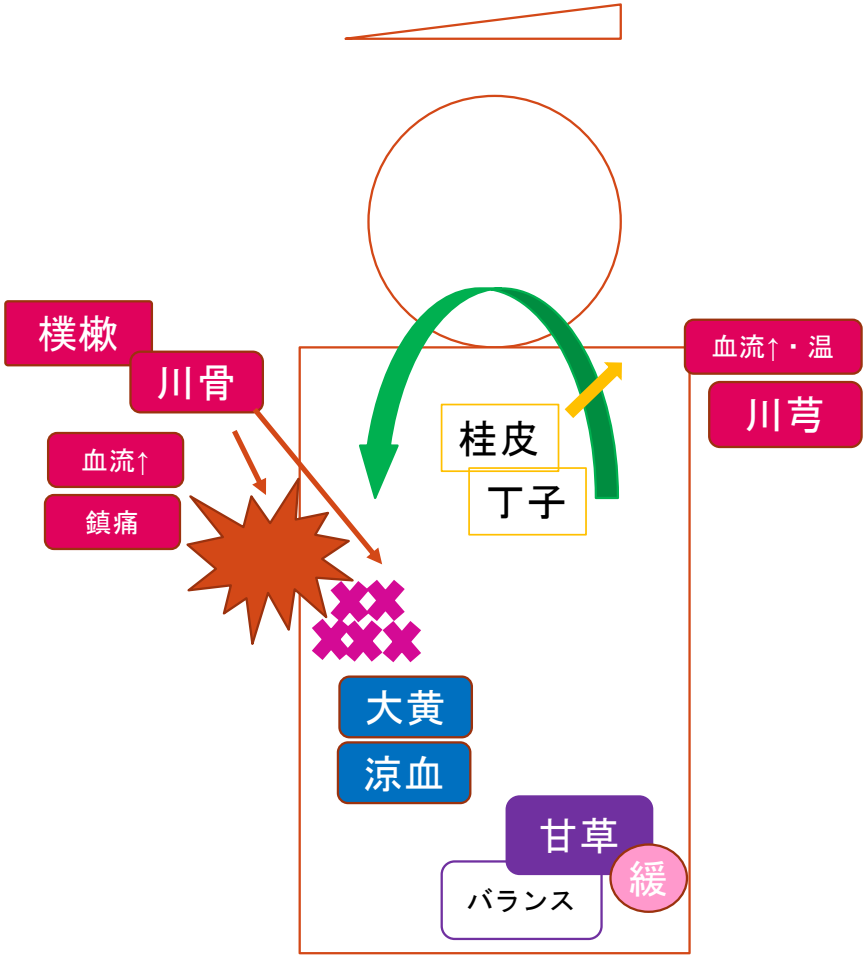
打撲、捻挫による腫れや痛みに用いる

治打撲一方はどんな処方？

- 打撲や捻挫による初期の炎症が治まった後、痛み、内出血（あざ）、腫れ、が残ってしまった人の症状の治療に用いる処方です。また、漢方薬として取り扱われていますが、古代～中世中国ではなく、江戸期の日本で作られた処方です。
- ***伝統的な考え方***：血の滞りを取り除くのと同時に、炎症と痛みを取り除く生薬が配合されています。体内にこもった熱を冷ます生薬はごく少量の大黄のみであり、むしろ桂皮や丁子など、身体を温め循環を活性化する生薬が配合されていることから、打撲直後の急性期ではなく、痛みが慢性的に残ってしまった場合に使用することを目的に作られた処方と考えられます。
- ***効能・効果***：通常、打撲によるはれや痛みの治療に使用される。

治打撲一方

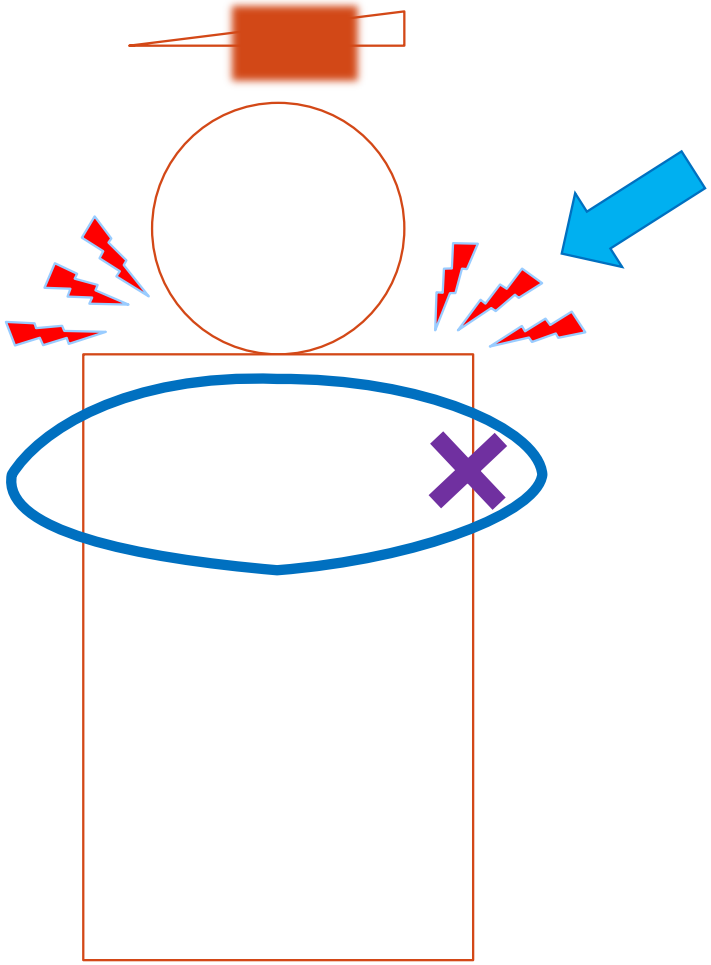
川芎、樸樕、川骨、桂皮、丁子、大黄、甘草



- 桂皮、丁子…気を巡らせることにより滞った血を動かす原動力となる。また、身体を穏やかに温めることで、より血行を改善する
- 樸樕、川骨…炎症を抑え、痛みを取り除く。また、血行を促進する作用もある
- 川芎…血流を改善し、身体を温める
- 大黄…血の中にこもった熱を取る
- 甘草…全体のバランスを取る、また、大黄の「冷やす」作用を緩和する

葛根湯

（葛根・麻黄・桂皮・芍薬・甘草・大棗・生姜）



陽／中間～実／表／寒

体力中等度～やや充実しているひとの風邪薬

・悪寒、発熱、頭痛などがある
・汗はない
・首から肩にかけて凝る

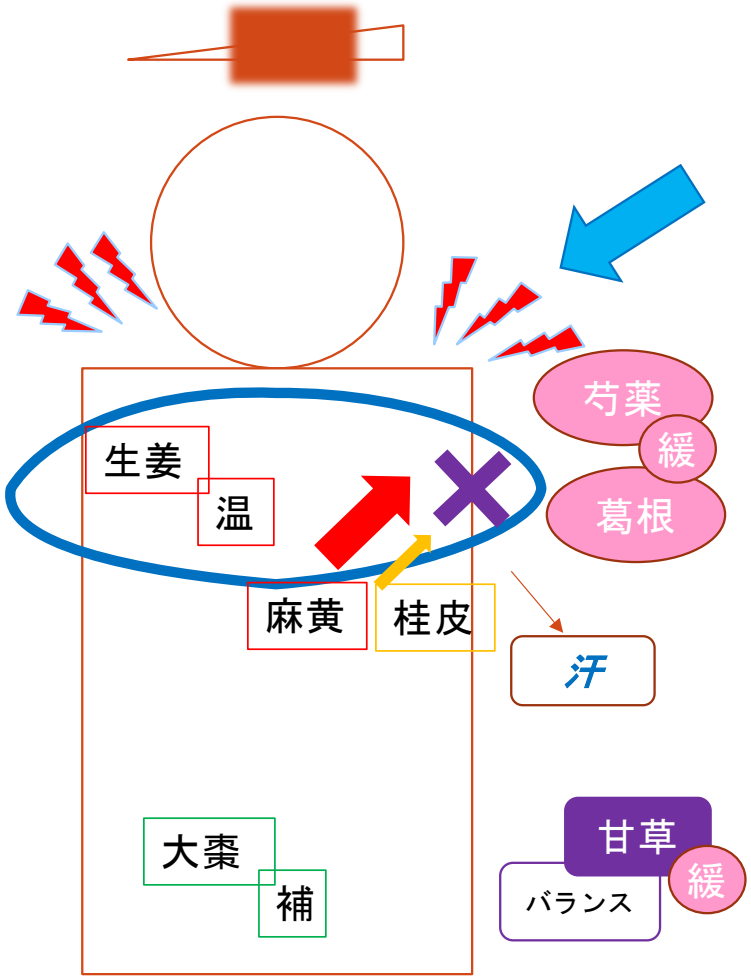
外部からの風邪（ふうじゃ）にやぶられる
↓
毛穴を閉じ、正気を皮膚表面に集めて邪を追い出そうとする

葛根湯はどんな処方？

- 風邪の初期に頻用される処方で、発汗を促すことで解熱効果を現わします。また、葛根には筋弛緩作用があることから、肩こりなどにも応用されています。
- ***伝統的な考え方***：桂枝湯に麻黄と葛根を加えた処方です。麻黄と桂枝で体を温め、発汗させて解熱をうながします。そのため、この処方は風邪をひいても汗の出ない、あるいは出にくい人を目標として使用するものです。比較的体力のある人に用いられます。葛根湯の適応となる人の特徴は「脈浮緊、自汗なし、肩こり」等で、これは傷寒論でいう太陽病にあたります。また、肩こりは本来、葛根湯証を判別するための要因でしたが、肩こりや四肢の痛みのみを目標として投与しても効果があります。
- ***効能・効果***：自然発汗がなく頭痛、発熱、悪寒、肩こりなどを伴う比較的体力のあるものの次の諸症：感冒、鼻かぜ、熱性疾患の初期、炎症性疾患（結膜炎、角膜炎、中耳炎、扁桃腺炎、乳腺炎、リンパ腺炎）、肩こり、上半身の神経痛、蕁麻疹

葛根湯

葛根・麻黄・桂皮・芍薬・甘草・大棗・生姜



- 桂皮…身体をあたため、正気を皮膚表面に押し出す
- 麻黄…身体を強くあたため、邪気を汗と共に排出する
- 芍薬…毛穴を緩め、また筋肉のこわばりを取る
- 葛根…筋肉のこわばりを取る
- 甘草…緩和
- 大棗…体力を補う栄養剤的な働き
- 生姜…身体の表面をあたためる

まとめ

- 漢方では人体を自然の一部と捉える
- 漢方には長年の観察と経験の結果から解釈した「imaginaryな人体の仕組みのイメージ」がある
- 非常に長期間にわたって観察と経験を積み重ねたため、imaginaryであっても現実に起きていることを解釈しうる
- 虚実・気血水・経絡・五臓六腑・（陰陽）五行説などの概念で生命や人体の仕組みを説明しており「科学的にはあいまいだが現実の身体の状態を言語化し得る」医学である
- 漢方は「証」の概念を用いて身体の状態を解釈することから、「単なる痛み止め」でない形で、外科的な領域にも使用できる内服薬を見出してきた